プロンプトによるナラティブ作文の評価の違い
—高得点を得た「よいナラティブ」の提示—

影山陽子・坪根由香里・数野恵理・トンプソン美恵子

要旨
本稿は、ナラティブ作文の good writing を探る研究の一環として、2 種類のプロンプトで日本人大学生が書いたナラティブ作文 42 編を対象に、評価項目別の平均点を分析した調査報告である。3 トレイト 14 項目の評価基準（坪根他 2020）で、項目毎の評価点を算出し、(1)各プロンプトの平均点の違い、(2) 同プロンプト内の上位作文と下位作文の平均点の違いに関して、 t 検定を用いて比較検討した。結果、各プロンプトの平均点では【内容】「独創性」「過不足ない描写」、【構成】「バランス」、【日本語】「多様性」と合計点に有意差が認められた。同プロンプト内の上位と下位の比較では【内容】「課題達成」「ポイントの明確さ」「一貫性」「過不足ない描写」、【構成】「順序立て」「結束性」「バランス」、【日本語】「正確さ」と合計点で上位作文の点数が有意に高かった。また、両プロンプトの最高得点の作文をみたところ、「論証型作文に近いもの」「文学的なもの」といった高得点のナラティブ作文が存在していた。

キーワード
good writing、ナラティブ作文、プロンプト、評価項目、日本人大学生

1. 研究の背景と目的
筆者らは、第二言語としての日本語のナラティブ作文の good writing を探り、評価項目・評価基準を開発することを目指しているが、その研究の一環として、本稿では日本語母語話者の大学生が書いたナラティブ作文を対象とした調査の結果について報告する。

ナラティブとは「一連の出来事を時間軸に沿って展開する文章」（田中・阿部 2014）を指すが、ある問題意識から対処、解決に至るまでの一定の展開が求められるものもあり、時間的経過・順序が示す範囲にはある程度の幅があると考える。

一般的に大学のレポートや論文では「論証」型が求められるが、「大学生にとって、書く文章はレポートや論文ばかりではない」（安藤 2018）という指摘もある。たとえば、エスノグラフィでの記述や就職活動時のエントリーシート等、時系列に沿って出来事や経験を記述するナラティブ作文もアカデミック・ライティングとして指導すべき文章といえるだろう。

これまで第二言語としての good writing 研究は、論証型作文を対象に行われてきた。田中・坪根（2011）は good writing とされるにはどのような要素が必要かを明らかにし、坪根・田中（2015）は評価者による異なりも考慮したうえで日本語小論文における「いい内容」「いい構成」の詳細を示した。さらに、評価方法との関連では、総合的評価とマルチプルトレイト評価の 2 つの評価方法で good writing を探る研究も行われている（田中他 2017)。また、ライティング評価の一致の難しさに関する研究（田中・長坂

2009）によるとトレイト[1]やプロンプト[2]の解釈の違い、レベルのずれ、ライティングの潜在能力をどのように評価するか、そして、評価者の個人的要因等が不一致をもたらすという。

一方、ナラティブ作文の研究は端緒についたばかりで、以下に示すように、限られた数の研究しか見当たらない。第二言語でのナラティブ作文に関しては、欧米の日本語学習者によるナラティブ作文の内容の評価項目について述べた影山（2019)、タイ人日本語学習者によるナラティブ作文を評価項目別に評価した坪根・影山（2020）がある。日本人大学生によるナラティブ作文に関しては、ナラティブ作文を評価し、特に点数が低いものを中心に分析を行った坪根他（2020）がある。また、坪根他（印刷中）では、ナラティブ作文の評価基準とルーブリックの開発について報告している。

このような中、アカデミック・ライティングの評価において、プロンプトの違いによって作文の評価がどのように変わるのかを調査することは、田中・長坂（2009）で示された観点でもあり、意味のあることだと考える。そこで本調査では、ナラティブ作文における good writing を探る研究の一環として、2 種類のプロンプトを用いて日本人大学生が書いたナラティブ作文について分析する。

本調査の目的は、(1) 各プロンプトの平均点（評価項目別・合計）の違いを分析し、プロンプトの違いがナラティブ作文の得点にどのように影響するのか、また、(2) 同じプロンプト内での上位作文と下位作文の平均点の違いについて分析し、上位作文と下位作文ではどのような項目で得点差が生じているかを明らかにすることである。さらに、高得点のナラティブ作文例も提示する。

2. 調査方法

2.1 調査対象

日本国内の 6 つの大学で学ぶ日本人大学生 21 名が、下記の 2 種類のプロンプトを用いて書いたナラティブ作文 42 編を対象とした。なお、調査協力者には調査の目的と概要、および個人情報の取り扱いについて説明し「調査承諾書」を受領の上で調査を実施した。

プロンプト 1「困難／大変だったこと」 あなたは海外の大学のサマープログラムに参加したいと思っています。学内審査の応募書類の１つに作文があります。タイトルは「困難／大変だったこと」です。これまでの経験の中で困難／大変だったことを説明し、それに対してあなたがどう対処したかを 600 字～800 字[3]で書いてください。
プロンプト 2「忘れられない出来事」 大学新聞で、「忘れられない出来事」という特集号を組むことになり、そこに記事を書くように頼まれました。あなたの「忘れられない出来事」についてのエピソードを紹介する文章を 600 字～800 字書いて、送ってください。

2.2 評価方法

まず、1 つの作文につき 3 名の評価者が、表 1 に示す「評価項目」（坪根他 2020）について、「非常によくできている」＝4 点、「ほぼできている」＝3 点、「あまりできていない」＝2 点、「できていない（かなり問題がある)」＝1 点の 4 段階で評価した。その後、3 名の中央値を各項目の評価点としたが、2 段階以上離れた項目については評価者間で評価

理由を出して話し合った上で各評価者が再評価し、評価点を確定した。

表 1　評価項目（3 トレイト 14 項目）　坪根他（2020）

内容	課題達成	課題を達成している
	ポイントの明確さ	メインポイントが明確である
	独創性	独創性があり、読み手にとって興味深い
	一貫性	主題と出来事の間に一貫性があり、全体の筋が通っている
	過不足ない描写	具体的で過不足のない、明確な描写（出来事・感想）がある
	導入部とまとめ	読者の理解を助ける導入部と効果的なまとめがある
構成	マクロ構成	マクロ構成（導入・本論・まとめ）がある
	順序立て	話の論理的な順序立てがある
	パラグラフ意識	パラグラフ意識がある
	結束性	パラグラフとパラグラフ、文と文の結束性があり、つながりがスムーズである
	バランス	重要でない詳細に分量を割きすぎておらず、全体の記述量のバランスが適切である
日本語	多様性	語彙・表現、文法、構文などに豊かさ、多様性がある
	スタイル	基本的にスタイルが統一されている（効果を狙っての使用を除く）
	正確さ	語彙・表現、文法、構文、句読点等が正確である

2.3　分析の手順と方法

まず、(1) 2 つのプロンプトの評価結果の違いを検討するため、21 編の作文の平均点（評価項目別・合計）について対応のある *t* 検定を行った。次に、(2) 同じプロンプト内での上位作文と下位作文の違いについては、各 21 編の作文を合計の平均点を基準に上位と下位の 2 グループに分けた。その結果、両プロンプトとも上位 12 編、下位 9 編となった。その上で、上位作文と下位作文の各項目の平均点について対応のない *t* 検定を用いてそれぞれ比較検討した。データの分析には SPSS version26 を用いた。

3.　結果と考察

表 2 は各プロンプトおよび同プロンプト内の上位作文・下位作文の平均点・標準偏差（*SD*）・*t* 検定の結果を示したものである。以下、順に見ていく。

表 2　各プロンプトおよび同プロンプト内の上位作文・下位作文の平均点・標準偏差（SD）・*t* 検定の結果

トレイト	評価項目 平均点・標準偏差（*SD*）・*t* 検定の結果	各プロンプトの平均点（*SD*）・*t* 値			同プロンプト内の上位作文と下位作文の平均点（*SD*）・*t* 値					
		プロ 1 平均（*SD*）	プロ 2 平均（*SD*）	*t* 値	プロ 1 上位 平均（*SD*）	プロ 1 下位 平均（*SD*）	*t* 値	プロ 2 上位 平均（*SD*）	プロ 2 下位 平均（*SD*）	*t* 値
内容	課題達成	3.48 (0.68)	3.67 (0.66)	1.00	3.75 (0.62)	3.11 (0.60)	2.36*	4.00 (0.00)	3.22 (0.83)	2.80*
	ポイントの明確さ	3.38 (0.81)	3.57 (0.68)	0.94	3.75 (0.62)	2.89 (0.78)	2.82*	3.92 (0.29)	3.11 (0.78)	2.95*
	独創性	3.24 (0.54)	3.76 (0.44)	3.20**	3.42 (0.51)	3.00 (0.50)	1.86	3.92 (0.29)	3.56 (0.53)	1.86
	一貫性	3.62 (0.67)	3.71 (0.56)	0.62	3.92 (0.28)	3.22 (0.83)	2.40*	4.00 (0.00)	3.33 (0.71)	2.83*
	過不足ない描写	2.67 (0.58)	3.29 (0.72)	3.53**	2.92 (0.52)	2.33 (0.50)	2.60*	3.58 (0.52)	2.89 (0.78)	2.46*
	導入部とまとめ	3.00 (0.63)	3.38 (0.67)	2.02	3.25 (0.62)	2.67 (0.50)	2.31*	3.58 (0.67)	3.11 (0.60)	1.67
構成	マクロ構成	3.24 (0.63)	3.48 (0.51)	1.42	3.42 (0.51)	3.00 (0.71)	1.57	3.42 (0.52)	3.56 (0.53)	-0.61
	順序立て	3.62 (0.50)	3.71 (0.46)	1.45	3.92 (0.29)	3.22 (0.44)	4.37***	4.00 (0.00)	3.33 (0.50)	4.00**
	パラグラフ意識	2.38 (1.16)	2.71 (1.18)	0.94	2.75 (1.06)	1.89 (1.17)	1.77	2.92 (1.00)	2.44 (1.42)	0.85
	結束性	3.48 (0.68)	3.67 (0.58)	1.28	3.83 (0.39)	3.00 (0.71)	3.46**	4.00 (0.00)	3.22 (0.67)	3.50**
	バランス	3.14 (0.73)	3.57 (0.59)	3.29**	3.58 (0.52)	2.56 (0.53)	4.48***	3.83 (0.39)	3.22 (0.67)	2.64*
日本語	多様性	3.19 (0.51)	3.81 (0.40)	4.24***	3.42 (0.52)	2.89 (0.33)	2.84*	3.92 (0.29)	3.67 (0.50)	1.34
	スタイル	3.48 (0.60)	3.71 (0.56)	1.56	3.67 (0.49)	3.22 (0.67)	1.76	4.00 (0.00)	3.33 (0.71)	2.83*
	正確さ	3.29 (0.78)	3.48 (0.60)	1.28	3.67 (0.49)	2.78 (0.83)	3.06**	3.83 (0.39)	3.00 (0.50)	4.30***
合計点		45.19 (6.05)	49.52 (4.56)	9.43***	9.43***	39.78 (5.07)	5.18***	5.18***	45.00 (2.74)	8.12***

プロンプト 1 はプロ 1、プロンプト 2 はプロ 2 と表す。　*p<.05　**p<.01　***p<.001

3.1　各プロンプトの平均点の違い

表 2 の各項目の平均点を見ると、全てにおいてプロンプト 1「困難／大変だったこと」よりもプロンプト 2「忘れられない出来事」のほうが点数が高い。 *t* 検定の結果、【内容】「独創性」（t=3.20、df=20、p<.01）、「過不足ない描写」（t=3.53、df=20、p<.01）、【構成】「バランス」（t=3.29、df=20、p<.01）、【日本語】「多様性」（t=4.24、df=20、p<.001）と合計点（t=9.43、df=20、p<.001）に有意差が認められた。

この違いはプロンプトの要求度と自由度の違いからきているのではないかと考えられる。プロンプトの要求度とは、たとえば、プロンプト 1 では「これまでの経験の中で困難

／大変だったこと」と「どう対処したか」という 2 つのことを書く必要があること等、プロンプトが課す要求の度合いである。また、自由度は、作文の形式やテーマ選択の幅の広さを指している。プロンプト 2 においては、エピソードをもとに何かを述べてもよいし、エピソードのみを細かく描写してもよく自由度が高い。「過不足ない描写」「バランス」は、限られた字数内でプロンプトの要求度が高ければ難しくなる、一方、「独創性」「多様性」は自由度が高ければ記述しやすく、評価点が高くなると考えられる。

3.2　同じプロンプト内での上位作文と下位作文の平均点の違い

次に、同プロンプト内の上位作文・下位作文の平均点の違いを見るために t 検定を行った。その結果、両プロンプト共通で有意差が認められた項目は、合計点（プロンプト 1：t=5.18、df=11、p<.001、プロンプト 2：t=8.12、df=19、p<.001）と【内容】「課題達成」（プロンプト 1：t=2.36、df=19、p<.05、プロンプト 2：t=2.80、df=8、p<.05）、「ポイントの明確さ」（プロンプト 1：t=2.82、df=19、p<.05、プロンプト 2：t=2.95、df=10、p<.05）、「一貫性」（プロンプト 1：t=2.40、df=9、p<.05、プロンプト 2：t=2.83、df=8、p<.05）、「過不足ない描写」（プロンプト 1：t=2.60、df=19、p<.05、プロンプト 2：t=2.46、df=19、p<.05）、【構成】「順序立て」（プロンプト 1：t=4.37、df=19、p<.001、プロンプト 2：t=4.00、df=8、p<.01）、「結束性」（プロンプト 1：t=3.46、df=19、p<.01、プロンプト 2：t=3.50、df=8、p<.01）、「バランス」（プロンプト 1：t=4.48、df=19、p<.001、プロンプト 2：t=2.64、df=19、p<.05）、【日本語】「正確さ」（プロンプト 1：t=3.06、df=19、p<.01、プロンプト 2：t=4.30、df=19、p<.001）、の 8 項目であった。プロンプト 1 も 2 も、上位作文はこれらの項目がよくできており、下位作文ではあまりできていないことがわかった。

また、プロンプト 1 のみで有意差が認められた項目は、【内容】「導入部とまとめ」（プロンプト 1：t=2.31、df=19、p<.05、プロンプト 2：t=1.67、df=19、$n.s.$）と【日本語】「多様性」プロンプト 1：t=2.84、df=19、p<.05、プロンプト 2：t=1.34、df=12、$n.s.$）2 項目であり、プロンプト 2 のみで有意差が認められた項目は、【日本語】「スタイル」（プロンプト 1：t=1.76、df=19、$n.s.$、プロンプト 2：t=2.83 、df=8、p<.05）であった。点数分布を見ると、「導入部とまとめ」と「多様性」は、作文 1 では上位作文の点数が高く、作文 2 では上位下位の分布に違いがない。反対に、「スタイル」は、作文 1 では分布に差がなく、作文 2 では上位作文の点数が高くなっていた。

一方、共通して有意差が認められなかった項目は【内容】「独創性」（プロンプト 1：t=1.86、df=19、$n.s.$、プロンプト 2：t=1.86、df=12、$n.s.$）、【構成】「マクロ構成」（プロンプト 1：t=1.57、df=19、$n.s.$、プロンプト 2：t=−0.61、df=19、$n.s.$）、「パラグラフ意識」（プロンプト 1：t=1.77、df=19、$n.s.$、プロンプト 2：t=0.85、df=14、$n.s.$）、の 3 項目であった。「独創性」「マクロ構成」の得点分布では全体的に 3 点以上が多く、上位下位に関係なく比較的できているものが多いこと、「パラグラフ意識」の分布では上位下位に関わらず 1、2 点のものが含まれていたことが原因だと推察される。なお、「パラグラフ意識」で 1 点の作文は、段落分けのないいわゆる 1 パラグラフの作文であった。

3.3　高得点ナラティブ作文例の提示

次に、高得点のナラティブ作文例として A～C の 3 編を提示する。

作文 A はプロンプト 1「困難／大変だったこと」の最高得点作文で、【内容】「独創性」、【構成】「マクロ構成」「パラグラフ意識」の 3 項目が 3 点、それ以外の 11 項目は 4 点を取得した合計得点 53 点（56 点満点）の作文である。

●作文 A

私の今までの経験で困難だったことは、留学中に外国人のルームメイトとルームシェアをしたことです。私は二年次に 4 ヶ月間アメリカに留学をしていました。最初の頃、韓国人のルームメイトと生活リズムや価値観が合わず、お互いがストレスを感じながら生活を送っていました。異なるバックグラウンドを持つ人との共同生活の難しさを痛感し、その原因を探ってみたところ、私があまり自分の考えを主張することが得意ではないこと、またそれに伴い、お互いが相手のことをあまり知らず一方的に相手に期待をしていることが考えられました。

この問題を解決し、お互いが快適に生活できる状態にするために、①自分が感じたことをストレートに相手に伝える②韓国人の生活スタイルや国民性を調べたり、韓国人の友人に尋ねたりする③話し合いの場を設けて徹底的に意見を交換する、という工夫を行った結果、お互いが相手の行動に至る原因を冷静に見つめることができるようになりました。それでも生活の多くを送る場所である部屋を共にするということは難しく、最終的に寮長を交えて協議したところ、生活時間の相違が根本的な原因であることがわかり、部屋替えをすることで合意しました。

次のルームメイトとは、あらかじめお互いの生活スタイルや妥協点について話し合い、ルールを決めることで、トラブルを防ぐことができました。この経験から私は、相手と自分のバックグラウンドが異なれば異なるほど、相手に期待をしないこと、自分の考えや意見は言葉ではっきりと伝えないと伝わらないことを学びました。

第一段落で「困難大変だったことの紹介と背景」を説明し「その原因」についても言及、第二段落で「問題への対処法とその結果」を、最後の段落で「次の機会への活かし方と学び」を記述している。限られた字数の中で、困難だった出来事とその対処法をバランスよく論理的に述べた「論証型」に近いナラティブ作文であった。

次にプロンプト 2 で、14 項目全てで 4 点を取った 56 点満点の作文 B と C を提示する。

●作文 B

私にとって忘れられない出来事は、高校の部活動のインターハイ予選でスターティングメンバーとして出ることが出来たことです。私はバスケットボールをしているのですが、身長も高くなく、足も速いほうではありませんでした。唯一得意だと言える所は、プレーの読みが少し良いということくらいでした。

当然一年生の頃は試合に出られる訳もなく、悶々とした日々を過ごしていました。背が高いだけで試合に出場する機会が多く貰えることに嫉妬してやる気がなくなってしまった時期もありました。しかし、ある日チームで一番小さい同級生が朝の練習や放課後練習で人一倍頑張る姿を見て、他の人がどうだろうが関係ない、自分がどうしたいかだということにようやく気づきました。それから私は朝の練習や放課後練習で同級生とペアを率先して組むようになり、筋力トレーニングも一緒に限界までやろうと一緒に頑張りました。

そうして高校三年生の最後の夏のインターハイ予選では、その同級生と共にスターティングメンバーに選ばれることが出来ました。引退試合でスターティングメンバーとして出ることが出来た時には本当に頑張って良かった、あの時諦めなくて良かったという気持ちで一杯でした。

スポーツは身体が資本の為、努力をすれば度合いは人それぞれですが確実に変わっていきます。それを実感出来た二年半でした。このような経験が出来るのも、学生スポーツの醍醐味なのではないかと感じました。負けて悔しい、だから努力するという過程は大人になってからでは中々味わえない物ですし、この経験は大きな財産になると思います。今でも辛い時はこの高校時代に夢中でがむしゃらに頑張った日々が鮮明に思い出されます。

第一段落で忘れられない出来事として「高校時代の部活動紹介と背景説明」をし、その後「自身の弱点への気づきと克服のための努力」、そして「その努力が実を結んでインターハイの予選でスタメン出場ができた」エピソードを記し、最後の第四段落で「スポーツでの努力経験から学んだこと」に言及しており、作文 A に共通する論理性、因果関係を記した「論証型」に近いナラティブ作文となっている。続いて、以下作文 C を提示する。

●作文 C

誰しも人生で一度は忘れられない恋があるだろう。私がどうしても忘れられないのは、17才の恋だ。

彼は演劇部だった。彼は色白で、髪が茶色くて、何かに怯えたような目をしていたけれど、好きだった。少し掠れた優しい声や、伸びた襟足、授業中はほとんど寝ていて、友達も多くはなさそうだったけれど、無性に惹かれた。理由は今でもわからない。

高校二年の六月。文化祭の後、意を決して彼を呼び出し、告白した私は見事に玉砕した。他に好きな人がいる、と言われたけれど、17才の私は諦めなかった。今は友達としてでもいい。振り向いてもらえるまで待とう。予想の何十倍も早く、彼は私の元へやってきた。が、彼は残酷だった。人間は誰しも残酷な一面を持っている生き物だけれど。「好きな子には彼氏がいて、僕は諦めなくちゃいけない。最低な人間だって自覚した上で言うけど、まだ僕のこと好きなら付き合ってください。君のこと好きになれるように努力するから。」と彼は言った。正直傷ついたし、二番目の女に喜んでなるなんて馬鹿馬鹿しいとも思った。けれど、そんなことどうでもいいくらいに、舞い上がっている自分がいた。

それかの（原文ママ）毎日は夢のようだった。ふわふわと宙に浮いているような感覚。彼からLINEが届く度にときめいたし、昼休みには二人で校舎を抜け出してお弁当を食べた。彼が手を握ってきたときは心臓が壊れるんじゃないかと本気で不安になるほどだった。少女漫画の主人公か！と思いながら、純粋に、苦しいほどに彼のことが好きだった。

夏休みの初め、学校の近くのお祭りに行った。二人で行くのは恥ずかしくて、友達とみんなで一緒に。それから夜の学校で肝試しをすることになり、周りに冷やかされながら彼と二人で回った。手を繋ぎながら、彼に置いて行かれないように、浴衣の小さな歩幅で必死に横を歩いた。学校の傍の墓地は怖かったけれど、怖がる私を見ている彼が楽しそうだったから、それで良かった。

夏休みが過ぎるにつれて、演劇の大会の練習が忙しいからと、彼からの連絡は途絶え、夏休みが終わる前に振られた。結局、君のことは好きになれなかったと言われ、毎日泣いた。人間こんなに涙が出るのかとびっくりするくらい、泣いた。

あれから 4 年の月日が流れ、心から信頼できる恋人がいる今でも、当時彼が好きだった曲を私は聴いている。その理由はわからない。

一方、同じプロンプト 2 で書かれた作文 C は、作文 B とはかなり異なった様相を呈している。忘れられない出来事として「忘れられない恋」を取り上げ、「彼についての描写と惹かれる私」の様子、「告白し振られたものの 2 番目の相手として付き合い始める」という恋の展開、「彼との夢のような日々」「お祭りでの肝試し、二人の時間」を描写し、その後の「ひどい形での恋の終わり」を書き、最後に「現在の私の持つ 17 歳の恋への慕情」

を記述している。さらに、作文内に波線を付したような体言止めや倒置文、リズムのよい短い文（～だった、～た）を用いたり、第一段落の最後の文に「理由は今でもわからない」、最終段落の最後の文に「その理由はわからない」と韻を踏むような文をそれぞれ配置したりする等、修辞的な技法を使った文学的なナラティブ作文となっている。

このように、同じように高得点を得た作文でもエピソードを題材に何かを論じる「論証型に近い」作文やエピソードそのものを修辞的な技法を使って描写した「文学的なもの」等、異なった「よいナラティブ」が存在することがわかった。

4. まとめと今後の課題

日本人大学生が書いた 2 種類のナラティブ作文を対象とした今回の調査でわかったことは以下の通りである。

ふたつのプロンプトの平均点の違いを分析したところ、【内容】「独創性」「過不足ない描写」、【構成】「バランス」、【日本語】「多様性」と合計点において差が認められた。これらの評価項目の得点差は、プロンプトの要求度・自由度の違いが要因だと考えられた。

同じプロンプト内での上位作文と下位作文の平均点の違いについての分析では、【内容】「課題達成」「ポイントの明確さ」「一貫性」「過不足ない描写」、【構成】「順序立て」「結束性」「バランス」、【日本語】「正確さ」の 8 項目と合計点で、上位作文のほうが有意に点数が高かった。つまり、高得点を得ているナラティブ作文は、これらの項目ができており、下位作文ではこれらができていないということがわかった。さらに【内容】「導入部とまとめ」、【日本語】「多様性」では、プロンプト 1 のみにおいて、【日本語】「スタイル」ではプロンプト 2 のみにおいて、上位作文のほうが有意に点数が高かった。一方、【内容】「独創性」【構成】「マクロ構成」「パラグラフ意識」の 3 項目は、両プロンプトで上位作文と下位作文の点数に差がなかった。

さらに、自由度の高いプロンプト 2 では論証型に近い作文だけでなく文学的な作文も高得点を得ており、異なる「よいナラティブ」が存在することがわかった。

これまでナラティブ作文はあまり研究対象にされてこなかったが、プロンプトの違いに関わらずナラティブ作文の下位作文では 【内容】「課題達成」「ポイントの明確さ」「一貫性」「過不足ない描写」、【構成】「順序立て」「結束性」「バランス」、【日本語】「正確さ」ができていなかったことから、これらに留意したアカデミック・ライティング指導が有用だといえよう。また、ナラティブ作文のプロンプトに関して、エピソードを題材に何かを論じる論証型に近いものからエピソードの描写のみでよいものまで幅がある。このことから、作文推敲時のピア活動において「プロンプトで何が要求されているか」「要求されているものが作文中に記述されているか」という観点を取り入れる、あるいは、教師がプロンプトを作成する際に、どのような作文が産出されやすいかをあらかじめ推測したり、教師同士で事前にプロンプトによる評価の違いを確認したりする等の工夫も、教育現場に取り入れられるのではないかと考える。

最後に本調査の今後の課題を述べる。本調査はナラティブ作文における good writing を探る研究の一環として行われ、今回は評価項目の合計点が高い作文を「よいナラティブ作文」とみなしたが、評価項目の重みづけが異なる場合もあるため、総合的な評価での分析も必要となるだろう。今後は、その観点を取り入れて精査をしたいと考えている。ま

た、「研究の背景と目的」で掲げたように、筆者らは第二言語としての日本語のナラティブ作文の good writing を探り、評価項目・評価基準を開発することを目指している。そのため、今回の日本語学習者によるナラティブ作文に関する調査と同様の調査を第二言語としての日本語のナラティブ作文でも行う予定である。本調査結果を参考資料とし、第二言語としての日本語のナラティブ作文の good writing を探り、評価項目・評価基準を開発したいと考えている。

（影山陽子かげやまようこ・山梨学院大学・yokokage405@gmail.com）
（坪根由香里つぼねゆかり・大阪観光大学・y-tsubone@tourism.ac.jp）
（数野恵理かずのえり・立教大学・kazuno@rikkyo.ac.jp）
（トンプソン美恵子トンプソンみえこ・山梨学院大学・m-thompson@ygu.ac.jp）

注

1. トレイトとは、作文評価で注目すべき特性のことをいう。
2. プロンプトとは、作文を執筆する際の課題文および書き方の指示、条件をいう。
3. 文字数については、執筆の注意で「500～1000 字」という基準も同時に示したため、実際の作文の文字数は 500～1000 文字になっている。プロンプト 2 も同様である。

参考文献

安藤葉子（2018）「大学で必要とされる『書く力』とは」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部起用』49，133-143.

影山陽子（2019）「ナラティブ型ライティングの評価のための探索的研究―構成要素に注目をして―」『ヨーロッパ日本語教育』24,ヨーロッパ日本語教師会,649-651.

田中真理・阿部新・影山陽子・佐々木藍子・坪根由香里（2017）「ヨーロッパ日本語学習者のライティング（エッセイ）分析：総合的評価とマルチプルトレイト評価結果を参照して」『ヨーロッパ日本語教育』22，ヨーロッパ日本語教師会，75-92.

田中真理・阿部新（2014）『Good writing へのパスポート―読み手と構成を考えた日本語ライティング』くろしお出版。

田中真理・坪根由香里（2011）「第二言語としての日本語小論文における good writing 評価－そのプロセスと決定要因－」『社会言語科学』14（1），210 - 222.

田中真理・長坂朱美（2009）「ライティング評価の一致はなぜ難しいか―人間の介在するアセスメント―」『社会言語科学』12（1），109－121.

坪根由香里・数野恵理・トンプソン美恵子・影山陽子（2020）「日本人大学生が書いたナラティブ作文の評価―日本語ナラティブ作文用の評価項目を用いて―」『2020 年度日本語教育学会秋季大会【予稿集】』203-208.

坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子・数野恵理（印刷中）「第二言語としての日本語ナラティブ作文の評価基準とルーブリックの開発」『大阪観光大学紀要』21，85-94.

坪根由香里・影山陽子（2020）「ナラティブ作文の評価に関する探索的研究－タイ人日本語学習者を対象として－」『タイ日研究ネットワーク Thailand 研究論集』1，46-55.

坪根由香里・田中真理（2015）「第二言語としての日本語小論文評価における『いい内容』『いい構成』を探る：評価観の共通点・相違点から」『社会言語科学 』18（1），111-127.